

『古事記』における「有」「在」「坐」「居」の用法について

—〈存在〉の意味を表す場合—

刀田 絵美子

(受理日二〇〇八年一〇月二日)

一・研究の目的と方法

従来の上代の和化漢文資料を扱った日本語学的な研究は、「なぜ和習が起るのか」という方向を向いていた。その研究の成果として、先行する文献の引き写し、和訓に引きずられた、などの仮説が示された。

しかし、ある漢字をそこに記すということが、どのような書記体系に裏打ちされた現象なのかという問いに答えられるものではなかった。

稿者は右のような問題意識から出発し、中国語を基盤として体系化された漢字が、日本では、どのように受容され展開してきたか、ということについて、日本語史研究の立場から解明することを研究の課題とする。

そこで本稿では、上代に編纂された文献のうち、『古事記』における〈存在〉の意味を表す漢字の種類を確認し、分析する。

『古事記』は、和銅五(712)年に成立したとされる、歴史書である。本文は和文風の漢文で書かれているのが特徴で、歌謡や訓注は万葉仮名で表記される。その構成は、「神の代」の物語である上巻、神と人との交渉が極めて深く、人が神々から十分解放されていない、いわば神話的、宗教的な色彩に富んでいる物語が多い中巻、神々から解放された人間そのものの物語である下巻の三巻から成る。

各漢字の用例から、どのような用字法が見られるか、帰納して考察することが、本稿の目的である。

『古事記』で用いられている〈存在〉の意味を表す漢字について、まとめて述べられたものを次に紹介する。

①沖森卓也「上代文献における「有・在」字」

本論文では、分析する際に正用文型か誤用文型という視点を用いる。また、「用法より、上巻と中・下巻が同一人の筆録によるとは考え難い」という立場で、「有」「在」を上巻と中・下巻に分けて考察している。要約すると次の通りである。

上巻 Ⅱ「在」の、場所を示す用例はともかく、他の用例については先行文献を踏襲した可能性が極めて強い。

中・下巻 Ⅱ見かけの上では、同等に使い分けられているように見えるが、実は全く限られた用法しか有していない。

②『日本思想大系一 古事記』

「類義語一覧」に「居坐する」という項目がある。要約すると、次の通りである。

「居」Ⅱ人物が居る意に主として用いられる。敬意の意がなく、国語のヨリに当る。

「坐」Ⅱ敬意の対象となる神や人物などの存在する意を表す。国語のイマスに当る。

本稿は、〈存在〉の意味を表す漢字を体系的に捉えることによって、その用法を明らかにしようとするものである。したがって、和習であるか否かについては述べない。この点で①と異なる。また、漢字が、どのような対象と結びついているか、ということ考察するために、漢字と和訓とを結びつけない。この点で②をはじめとする従来の研究方法と異なる。

使用するテキストは、『日本古典文学大系一 古事記 祝詞』⁴⁾を基本のテキストとし、適宜、他の注釈書を参考とした。引用文に、傍線部を付した漢字が研究の対象とした漢字である。引用文の後に括弧で示すのは、『日本古典文学大系一 古事記 祝詞』における頁数と行数である。用例を引用する際は、旧字体を新字体に改めて白文で掲載し、調点・分注・音注等は省いた。

また、漢字の検索は、国文学研究資料館が公開している、「日本古典文学本文データベース」を利用した。

なお、〈存在〉の意味を表す漢字の用例のうち、研究の対象としたのは、次の要件を満たす用例に限った。

①一文(一文節)中で本動詞として用いられる

②〈存在〉の意味で用いられる

右の要件を満たさず、研究の対象から外した用例は、次のものである。

例外① 〈存在〉以外の意味を表す動詞

例外② 複合語の後部要素

例外③ 固有名詞の一部

例外④ 陳述の助動詞「デアル」

二 『古事記』における〈存在〉を表す漢字の用法

I. 各漢字の特徴

『古事記』のなかで〈存在〉の意味を表す動詞として用いられる漢字は、「有」「在」「坐」「居」の四字であった。

まず、本稿で取り上げる漢字が〈存在〉の意味を持つ漢字として認識されていたかを探るため、古辞書で和訓を確認した。観智院旧蔵『類聚名義抄』⁵⁾には、次のようにある。

(有) 佛上 46丁表2

アリ マシマス アマリ(ル) タモツ モハラ アルイハ 和ウ

(在) 佛上 45丁裏6

音載 又上声 アリマシマス ハムヘリ ツマヒラカ 終、アキラカニナ

リ 見、オキテ

(坐) 法中 35丁表4

除果反 キル マシマス スフ ヲリ ツミ ヨル(リテ) ツミス 和サア

(居) 法下 46丁表4

拳魚反 キル ヲリ オク イク生 スフ 安居俗 ヲリトコロ 又音基

語助 和コ

つぎに、『古事記』における各漢字の用例を整理した。⁶⁾

まず、「有」は、全八十一例中、七十七例が〈存在〉の意味を表す。⁷⁾

【有】 乘天之羅摩船而、内剥鵝皮剥、為衣服、有_レ帰来神。(p106.14)

【有】 作筌有_レ取魚人。(p152.13)

【有】 傍之井上、有_レ湯津香木。(p136.09)

「在」は、全五十九例中、五十七例が〈存在〉の意味を表す。

【在】 於此国道速振荒振国神等之多在。(p112.06)

【在】 老夫与老女二人在而、童女置中泣。(p84.10)

【在】 到黄泉比良坂之坂本時、取在其坂本桃子三箇 (p66.02)

「有」「在」は、『古事記』のなかで、人・神・ものなどの〈存在〉を表す、という点で共通し、〈存在〉の意味を表すための、核となっている漢字だといえる。両字の意義差については後に検討する。

「坐」は、全百九十八例中、百四例が〈存在〉の意味を表す。そのうち、

八十八例が神・天皇・皇族の〈存在〉を表す。

【坐】其伊邪那岐大神者、坐淡海之多賀也。(p72.13)

【坐】若帶日子天皇、坐近淡海之志賀高穴穗宮 (p226.05)

また、連体修飾節として、神・天皇を修飾する例は十二例ある。

【坐】此者、坐御諸山上神也。(p108.12)

【坐】速坐天安河之河原、天照大御神、高木神之御所。(p114.10)

これらの例より、「坐」は神・天皇をはじめとして、身分が高い人物の〈存在〉を表す時に用いられることが分かる。

また、身分が高い人物の子どもの〈存在〉を表す例が三例ある。

【坐】次師木津日子命之子、二王坐。(p168.03)

【坐】此二王之女、五柱坐。(p174.10)

これも、先に見た、身分が高い人物の〈存在〉と関係する用法だと考えられる。この用法は、地の文でのみ見られ、会話文では「有」「在」が用いられる。また、無生物である刀に用いられる例が一例ある。

【坐】此刀名、云佐土布都神、(中略)此刀者、坐石上神宮也。(p152.07分注)

この刀は別名を「佐土布都神」と説明され、「神」に準ずるものとして扱われたために、刀であるにも関わらず、「坐」が用いられたと考えられる。なお、この用例は分注で用いられている点も、他の用例と異なる。

以上の用法から、〈存在〉を表す動詞の体系の中で、身分の高さに応じて用いられる漢字が、「坐」だといえる。

最後に、「居」は、全二十七例中、十九例が〈存在〉の意味を表す。「居」は、伊邪那美命の体に化成した「雷」の〈存在〉を表す場面で、まともって用いられる。

【居】加礼許呂岐弓、於頭者大雷居、於胸者火雷居、於腹者黒雷居、於陰者拆雷居、於左手者若雷居、於右手者土雷居、於左足者鳴雷居、於右足者伏雷居、并八雷神成居。(p64.06-08)

それ以外の用例を検討してみると、ある場面において、相対的に身分が低い神・人物について用いられる。

【居】故、天皇坐筑紫之詞志比宮、将撃熊曾国之時、天皇控御琴而、建内宿祢大臣居於沙庭、請神之命。(p298.02)

この用例では、「天皇」よりも身分が低い「建内宿祢大臣」の〈存在〉を表す時に「居」が用いられる。一方で、「天皇」には「坐」が用いられている。

これらの用例から、「坐」が身分が高い人物の〈存在〉を表すのに対し、「居」は、ある場面において、相対的に見て身分が低い人物の〈存在〉を表すのに用いられるといえる。

II. 「有」「在」の意義差

本節では「有」「在」の意義差が、『古事記』に見られるか、ということを検討したい。

まず、両字は中国漢文でどのような差があるのか、確認する。

(表1) 中国漢文における「有」「在」の違い⁸⁾

漢字	語順	和訓	用例
有	「場所」+「有」+「人・もの」	〜アリ	城中有人【城中に人アリ】
在	「人・もの」+「在」+「場所」	〜ニアリ	人在城中【人、城中ニアリ】

つぎに、「有」「在」では、どのような〈存在〉を表すか、ということに注目し、用例を確認した。用例数の多少はあるにせよ、「有」「在」の用例を、十五項目の用法に分類することができる。次の通りである。

①「人」が(〇〇に)いる

【有】於是須佐之男命、以為人有其河上而。(p84.09)

【在】八十建、在其室待伊那流。(p156.13)

②「神」「王」が(〇〇に)なる

【有】是時有光海依來之神。(p108.09)

【在】爾大御神詔、汝者不可在此國而、神夜良比夜良比賜。(p74.10)

③人・神以外の有情物が(〇〇に)なる

【有】是以海神、悉召集海之大小魚問曰、若有取此鉤魚乎(p140.03)

【在】菟答曰、僕在隱岐嶋、雖欲度此地、無度因。(p90.13)

④自然物が(〇〇に)ある

【有】豐玉毗売之從婢、持玉器將酌水之時、於井有光。(p136.12)

【在】其河謂佐草河由者、於其河辺山由理多在。(p164.02分注)

⑤人工物が(〇〇に)ある

【有】於是探赤海鯽魚之喉者、有鉤。(p140.06)

【在】爾思怪以御刀之前、刺割而見者、在都牟刈之大刀。(p88.01)

⑥名、身体の一部が(〇〇に)ある

【有】此嶋者、身一而有面四。(p54.12)

【在】爾伊邪那岐命詔、我身者、成成而成餘処一处在。(p52.10)

⑦(〇〇)という人に)子ども・兄弟姉妹がいる

【有】亦我子有建御名方神。(p120.10)

【在】我之女者、自本在八稚女。(p84.13)

以上が、「有」「在」に共通してみられる用法である。以下は、「有」にのみ見られる用法である。

⑧「心」が(〇〇に)ある

【有】其八十神、各有欲婚楯羽之八上比売之心。(p90.08)

⑨出来事がある

【有】若有急事解茲囊口。(p212.05)

⑩前兆(「表」「験」)がある

【有】如此之夢、是有何表也。(p190.06)

⑪「国」が(〇〇に)ある

【有】於是大后婦神、言教覺詔者、西方有国。(p228.03)

⑫ことばがある

【有】莫動其刀。僕有白言。(p208.08)

⑬「由」がある

【有】三年雖住、恒無歎、今夜為大一嘆。若有何由。(p140.01)

⑭病気がある

【有】天皇辭而詔之、我者有一長病。(p290.11)

⑮「功」がある

【有】為吾雖有大功、既殺己君是不義。(p286.08)

用法ごとに用例数を示すと、(表2)の通りである。

(表2) 用法別漢字分類表¹¹⁾

用法	「有」		「在」	
	上巻	中下巻	上巻	中下巻
①「人」が(〇〇)にいる		7		
②「神」「王」が(〇〇)にゐる		13	1	3
③人・神以外の有情物が(〇〇)にいる	1	2	4	1
④自然物が(〇〇)にある	2	5	1	3
⑤人工物が(〇〇)にある	2	5	3	32
⑥名、身体の一部が(〇〇)にある	5		2	
⑦(〇〇という人)に「子ども・兄弟姉妹がいる」	3	1	2	1
⑧「心」が(〇〇)にある	2	8		
⑨出来事がある		4		
⑩前兆(表「験」)がある		3		
⑪「国」が(〇〇)にある		2		
⑫「しほ」がある		2		
⑬「由」がある	2			
⑭病気がある	1	1		
⑮「功」がある		1		

用法を整理することで、「有」「在」で共通して用いられる用法が多いことが分かった。しかし「有」の方が、より多くの用法で用いられる。

本節では、両字に明確な意義差が認められなかった。そこで、個別の対象についての用字法を、次節でまとめる。

Ⅲ. 特徴的な用字法

本節では、〈存在〉を表す用字法のうち、「有」「在」を中心に、特徴的な用法について述べる。

i 神・天皇の〈存在〉

神・天皇の〈存在〉を表す用例が、「有」「在」でも見られることが、(表2)から分かる。しかし、神・天皇の〈存在〉は、「坐」で表していた。どのような違いがあるのだろうか。

用例を確認してみると、神・天皇の〈存在〉を表す「有」で、五例中一例、「在」で四例全てが会話文で用いられている。その内訳は、身分が高い神・天皇が、身分が低い神・王に対して用いる例が四例、神が己に対して用いる例が一例である。

【有】其御祖命、(中略)告其子言、汝(稿者注*大国主神)有此間者、遂為八十神所滅、(p9409)

【在】天皇答詔之、此者為、在山代国我之庶兄建波邇安王、起邪心之表耳。(p18403)

【在】伊邪那伎大神詔、吾者至於伊邪那志許米志許米岐穢国而在(邪理)。(p6802)

地の文で、神・天皇の〈存在〉を表す用例が、「有」には四例ある。そのうち、三例は「大国主神」「日子番能迹迹藝命」などの神と比べて、身分が低い神に対して用いられる。

【有】日子番能迹迹藝命、将天降之時、居天之八街而、上光高天原、下光原中国之神、於是有。(p12605)

また、身分が高い人物に子ども・兄弟がいることを表す場合、会話文では「有」「在」が用いられることが多いのに対し、地の文は「坐」が用いられる。

【有】天照大神(中略)問其大国主神、今汝子、事代主神、如此白詔。亦有可白子乎。(p12009)

【在】天津日高日子番能迹迹藝命、(中略)問有汝之兄弟乎、答曰、我姉石長比売在。(p13015)

これらの用例より、「坐」は、身分が高い者の〈存在〉を表すが、同じ神や皇族であっても、会話文で、身分が高いものが身分が低いものに対して用いる場合や、地の文でも相対的に見て身分の低い存在に対し、「有」「在」を用いることが窺える。

以上のことから、「有」「在」に対応する待遇表現として、「坐」を位置づけることができるだろう。

ii (御)陵の〈存在〉

(表2)で突出した用例数を示しているのは、「在」⑤(人工物が(〇〇)にある)である。これは、『古事記』のなかに、「(御)陵」の〈存在〉を表す用例が上巻に一例、中・下巻に二十九例あるためである。

【在】御陵在畝火山之西方白栲尾上。(p166.09)

「有」で、「(御)陵」の〈存在〉を表す例はなく、「(御)陵」の〈存在〉を表すことが、「在」の特徴であるといえる。特に、「神の代」の物語から、「人の代」の物語に移行する、中・下巻にその用例は多く見られる。

漢籍では、このような用例は、歴史書を中心に、主に注で用いられている。このことより、『古事記』が漢籍の中でも、歴史書の影響を受けている、ということを描き出すことができる。しかし、本文ではなく、注で用いられる用字法を踏襲している点も、興味深い。

三. 研究の成果と今後の課題

本稿では、『古事記』における〈存在〉を表す漢字(「有」「在」「坐」「居」)が、次のような体系を持つことを明らかにした。

「有」…人間・神・ものの〈存在〉

「在」…人間・神・もの(特に「(御)陵」)の〈存在〉

「坐」…神・天皇の〈存在〉

「居」…相対的に見て、身分が低い人間・神の〈存在〉

稿者は、他の上代文献でも同じような調査・考察を行った。例えば、『播磨国風土記』では、左に示すように、〈存在〉の意味を表す漢字を体系化することができる。

「有」…人間・ものの〈存在〉

「在」…神・天皇の〈存在〉

「坐」…(移動してきた)神・天皇の〈存在〉

「居」…人間の〈存在〉

本稿で述べた用法のうち、「有」は人間やものの〈存在〉を表し、「坐」は神・天皇の〈存在〉を表す、という点で『播磨国風土記』と共通する。しかし、『古事記』には、『播磨国風土記』のように、「坐」で〈存在〉を表す神に、「移動してきた」という限定条件は見られない。また、『古事記』では、場面に応じて、「有」「在」「坐」「居」が用いられるが、『播磨国風土記』では、神・天皇の〈存在〉を表す漢字は「在」である。

両文献の著述者は、官僚であることが想定されるため、〈存在〉の意味を表すための、共通する枠組みを持つていたと仮定してみる。用例からも、共通する用字法を見出すことができる。一方で、異なる用字法も見出せる。これは、何の差によるのだろうか。

例えば、『古事記』は「神の代」から「人の代」に渡る歴史書であるのに対し、『播磨国風土記』は、地方の伝承をもとに、地方で著述された地誌である。そのため、前者は「場面」における神々・人々の位置づけを問題とし、後者はある地域で語られる「神」「人」を問題とする必要がある。

仮定に立脚するとはいえず、これは、語られる内容に応じて、用字法が異なる、という仮説を立てることができる。

ある文献の用字法を決定づける「位相」とはなにか、ということは今後も検討していきたい。

なお、『古事記』の問題点は、著述されたままのテキストにあたることではないという点である。

今後は、著述されたままのテキストを研究の対象として、訓を同じくする漢字の体系を明らかにしていきたいと考えている。

また、そのような研究を通して、日本の中で、漢字がどのように受容され、展開していったか、ということも考えていきたい。

【参考文献・データベース】

テキスト

倉野憲司・武田祐吉校註『日本古典文学大系一 古事記 祝詞』岩波書店 1958.6

青木和夫・石母田正・小林芳規・佐伯有清校注『日本思想大系一 古事記』岩波書店 1982.2

山口紀佳・神野志隆光校注・訳『新編日本古典文学全集一 古事記』小学館 1997.6

古辞書

天理図書館善本叢書和本部編集委員会『天理図書館善本叢書和本部 第三一三四巻 観智院本類聚名義抄 佛法僧』八木書店 1976.9-11
 正宗敦夫編纂校訂『類聚名義抄 第一巻・第二巻』風間書房 1954.3-1955.6

文献

沖森卓也編『資料 日本語史』おうふう 1991.2
 金水敏『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房 2006.2
 飛田良文編『日本語学研究事典』明治書院 2007.1
 森博達『日本書紀の謎を解く』中央公論新社 1999.10

論文

沖森卓也「上代文献における「有」「在」字」『国語と国文学』Vol.56 No.6 1979.6

吉野政治「尊敬の助動詞マス（イマス）成立考—古事記の用例を通して—」『万葉』百五十号 1994.5

データベース

国文学研究資料館・日本古典文学本文データベース http://base3.nijl.ac.jp/Reg-bin/hon_home.cgi
 中央研究院 漢籍電子文獻 <http://www.sinica.edu.tw/fms-bin/fmsws3>

【注】

- (1) 沖森[1979なぶ]。
- (2) 『資料 日本語史』p141
- (3) 『日本古典文学大系一 古事記 祝詞』等を参考に、稿者がまとめた。

(4) このテキストは、「享和三（稿者注*1803）年版の『訂正古訓古事記』を本文の底本とし、真福寺本を始め代表的と思われる数種の写本（複製本）刊本を以て校訂」されている。『訂正古訓古事記』の本文は、「上巻と中下巻とが成立事情を異にしているばかりでなく、全体にわたって疎漏も多く、必ずしも今日一般に定本視されているほどのものではない」ことが凡例で述べられている。稿者が、本稿で研究の対象とした用例を確認したところ、「日本古典文学大系一 古事記 祝詞」では校異がある箇所はなかったため、利用しやすく、信頼できるテキストとして、『日本古典文学大系一 古事記 祝詞』を基本テキストとした。なお、研究の対象としなかったもので、校異があると考えられているのは、次の二箇所である。

【坐】遂神遊坐也 (p6006) ↓異本によって、「坐」がない。
 【居】謂居寤清泉也 (p21809) ↓異本によって、「寤居」とする。
 観智院旧蔵『類聚名義抄』を引いたことは、次の二点による。

- (5) ① 特定の位相に偏った訓ではなく、諸訓を収集した辞書である。
- ② 一辞書の中に、今回取り上げる四字すべてに対して訓を当てているものとしては、最古の辞書である。
- (6) 本論文で研究対象となる用例数と、各漢字の総数を、次の表に示す。

(表) 『古事記』における、「有」「在」「坐」「居」の総数

漢字	研究の対象	例外①	例外②	例外③	例外④	総計
有	77	0	0	1	3	81
在	57	0	1	0	1	59
坐	106	10	69	9	4	198
居	20	2	4	1	0	27

- (7) 用例の中には、「有那理」と表記するものもある。この場合の「有」は、「阿理那理」という万葉仮名表記から「アリ」の終止形であると推定されている。『日本思想大系一 古事記』活用語尾を万葉仮名で表記する例は、「有那理」、「在那理」（以上、各一例）、「坐那理」（二例）があり、それぞれ研究の対象とした。
- (8) (表1) は森博達『日本書紀の謎を解く』をはじめとする先行研究を参考に、稿者がまとめた。

- (9) これに分類したのは、以下の通り。(木、光、沼、海、実、草)
- (10) これに分類したのは、以下の通り。(路、鉤、刀、火打、家、御陵、御裳之石)
- (11) 様々な先行研究で、上巻と中・下巻に差が認められることが言及されているため、本稿でも上巻と中・下巻に分けて分析した。なお、「序」は、後世の偽書であるという説もあり、(表1)には反映させなかった。「序」には「有」が一例あり、①「人」が(○○)に いる、という意味で用いられている。
- (12) 『日本思想大系一 古事記』に、「古事記では「陵」が五二例あり、全部が天皇・皇后や皇族について用いている。天皇には「御陵」、皇后や皇族には「陵」という傾向がある」とある。
- (13) 中央研究院が公開している、「漢籍電子文献」で検索した。
- (14) 「漢字の位相別使用から見た日本語記文の歴史的研究」(広島大学大学院教育学研究科 平成十九年度修士論文)

(指導教員 佐々木 勇)

About the Usage of 有, 在, 坐, and 居 in 'Kojiki'.
— When they show the meaning of <existence> —

Emiko Toda

Abstract: In ancient Japan, Japanese was written in the Chinese characters. This thesis makes report about the usage of 有, 在, 坐, and 居, when they show the meaning of <existence> in 'Kojiki'. (It is said that it was written in 712.) The result of the investigation is recorded as follows: 有 shows the <existence> of the person, the god, and the object. 在 also shows the <existence> of the person, the god, and the object, but it often shows the <existence> of the imperial mausoleums. 坐 shows the <existence> of the god and the emperor. 居 shows the <existence> of lowly person and the god as compared with another.

Key words: Chinese style that makes for Japanese, Chinese characters, usage, <existence>
キーワード：和化漢文、漢字、用法、〈存在〉

